往生院

前

ワキ　上野の僧

シテ　里女

後

ワキ　前に同じ

シテ　勾当内侍

地は　山城

季は　秋

ワキ次第「迷ふと思ふ心こそ。〳〵。誠の道のしるべなれ。

詞「是は上野の国より出でたる僧にて候。我此程は都に候ひて。洛陽の仏閣残りなく拝みめぐりて候。又是より嵯峨野の方へと志し候。

歌「さらでだに。恨みわびぬる夕暮の。〳〵。荻の上葉に秋の来て。草葉に露の余るらん。こゝも浮世の嵯峨なれや。嵐の山に澄む月の。行方も知らぬ所まで。尋ね訪ひてぞ暮らしける。〳〵。

ワキ詞「げにや秋の日のならひ。程なう入相の頃になりて候。あれなる賤が屋に立ち越え。一夜を明かさばやと思ひ候。

シテ一声「身にしみて。秋風寒き今宵だに。衣かたしき独ねる。草にもあらぬ我袖の。かれてのみなど人や見ん。

サシ「身の憂さを歎くあまりの夕暮に。訪ふも悲しき嵐山。袖に吹きまく秋の色。移りかはるや世の習ひ。

道こそかはれ人毎に。忍ぶは同じ昔なり。よしや夢ぞといひなさば。身には現の程やなき。

下歌「月に慰む秋の夜に。誰が為め曇る涙なる。

上歌「知られじな。草葉の露にあらぬ身の。〳〵。消えても残る妄執の。深き思ひは大井川。流れて早き月日だに。明かしかねたる浮世かな。〳〵。

ワキ詞「如何に此屋の内へ案内申し候。

シテ詞「案内とは如何なる人にて御入り候ふぞ。

ワキ「是は此処始めて一見の僧にて候ふが。日の暮れて候ふ程に。一夜の宿を御借し候へ。

シテ「余りに住み荒し候ふ程に。御宿は叶ひ候ふまじ。

ワキ「いや苦しからず候。殊に出家の事にて候へば。平に一夜を明かさせて賜り候へ。

シテ「げにや出家の御事。一宿は利益なるべければ。たゞ草枕と思し召し。一夜を御明し候へ。さらば此方へ御入り候へ。

ワキ「近頃ありがたう候。や。鐘の音の聞え候。何れの御寺にて候ふぞ。

シテ「あれこそ嵯峨の往生院にて候へ。又いにしへ此処には。義貞の妹背の契り浅からざりし。勾当の内侍住み給ひて候ふが。跡とふ人もなき世とて。賤が家路に成りて候。

ワキ「仰の如く。内侍此処に住み給ひたると承り及びて候。さては其跡のしるしも無く候ふか。

シテ「いや亡き跡のしるしとてもなく候。只このあたりを申し習はし候。

ワキサシ「痛はしやさしも内侍は名も高き。雲の上にも双びなき。容色たりし人なれども。名のみ残りて今更に。跡とふ人もなき事よ。あら痛はしや候。

シテ「げによく御弔ひ候ふ物かな。さなきだに女は五障の罪ふかき。馴れし妹背も浅からぬ。中将殿の御最期を。知らで越路に誘はれ。

地「処は浅水の。橋を渡りし折柄に。瓜生とやらんいひし人に。思はずも参りあひ。君なくならせ給ふ由を。聞くや心も乱髪の。結ぼるゝ面影の。浮ぶも悲し諸共に。詠めし夜半の月なれば。縦業因重くとも。照し給へと言ひ捨てゝ。姿は見えずなりにけり。〳〵。（中入）

ワキ歌「夕べを過ぐる月の夜に。〳〵。松風ふきて物凄き。草の陰なる露の身を。思の珠の数々に。かの御跡

を弔はん。〳〵。

後ジテ「我袖の。涙に宿る影とだに。知らで雲井の月や澄みなん。

ワキ「不思議やな暁の。機織る虫の音も弱る。草葉の露の月影に。あらはれ給ふ人影は。いかなる人にてましますぞ。

シテ「いや恥かしや我名をば。何と夕べの月の夜の。隈なき空に中将の。迷ひ給ひて起きもせず。

ワキ「寐もせで夜を明かしつゝ。
シテ「終に逢瀬は有りといへど。
ワキ「程なく別れこゝも猶。
シテ「うき世を嵯峨に身を果てし。
ワキ「其勾当の。
シテ「内侍なり。
地「思ひ分かでも忍ぶらん。〳〵。過ぎにし方も同じ浮世。もろき涙のくせとてや。昔を語る夢の世の。

十の姿のさま〴〵も。只心よりなすわざの。積る邪婬の妄執を。顕はす今の夢人の。罪を助けてたび給へ。〳〵。
ワキ「さては勾当の内侍にてましますか。其時のありさま委しく御物語り候へ。
クリ地「抑勾当の内侍と申すは。頭の大夫行房の娘にて。金屋の内に粧ひを閉ぢ。鶏障の下に媚を深うして。二八の春より内侍に召されて。君主の側に侍ひけ

り。

シテサシ「然るに内侍の容色。

地「春の風一片の花を吹き残すかと疑はる。紅粉をことゝする顔ばせは。秋の雲半輪の月を吐き出だすに似たり。

シテ「されば椒房の三十六宮。

地「五蘊の漸にめぐる事をいたみ。禁漏の三十五声。一夜の正に長き事を恨む。

クセ「ある夜月冷しく。風秋なるに内侍は。半簾を巻かせて。琴を弾じ給ひし。其音声に中将は。心引かれてあやなくも。あこがれし心より。若しゝるべする海士あらば。忘草の生ふといふ。浦にも尋ね行かましと。そゞろに思ひ沈みしを。なほざりならず聞し召し。中将に下し給ふ。あやなく迷ふ心の道。諫むる人もなかりしかば。建武の頃かや朝敵の。憂き西海の波の上に。たゞよひし其時も。

厭はぬ物を見ても又。見まくほしさの契りとて。
既に征路に滞る。

シテ「其後山門臨幸に。

地「是も都や志賀の浦。磯打つ波の寄手ども。大嶽よりも落されて。秋の紅葉のちり〴〵に。なりゆく時も如何なれば。独ながむる夕暮は。如何に露けき袖の上と。暫しの別れ悲しみて。遂に本意を遂げ給はず。誠は一度笑んで。よく国を傾くと。古

人のいましめも。道理なりと覚えたり。

シテ「一夜の程と見る夢は。

地「さめても遠き昔なり。（序の舞）

地「会者定離の道理に。愛別離苦の眠りを覚し。

シテ「懺悔に罪の雲晴れて。

地「月の光をしるべにて。二世安楽の国にはや。生れん事の嬉しさよ。たゞ頼め頼もしき。我を導く法の道。げにや思へば春秋の。花も紅葉もおしなべ

て。空しき空ぞ誠なる。是や八万諸聖教。皆是弥陀仏なるべしと。御僧を拝し罪科も。迷ひの雲も空晴れて。真如の月の西方に。〳〵。行くかと見えて失せにけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第二輯』大和田建樹 著